

栽培漁業推進対策事業（スジアラ）

狩俣洋文・仲盛 淳・呉屋秀夫

1. 目的

本県において、高級水産重要魚種であるスジアラ（方言名：アカジン）の、八重山周辺海域での栽培漁業を推進するため、スジアラ人工種苗の陸上中間育成を実施した。

2. 材料及び方法

中間育成を行ったスジアラ種苗は、水産総合研究センター八重山栽培漁業センターで平成16年6月20日に孵化、種苗生産したものである。この種苗1,630尾（平均全長39.6mm(31.4-49.5mm)）を9月3日（日令74日）に受け入れ、60t角形コンクリート水槽で中間育成を開始した。水槽収容時に、共食いを防ぐため6mm選別器で大・小群にわけ、それぞれ目合い3mmのモジ網(12m³)で飼育した。9月24日（日令95日）に両群を5mmモジ網1面に統合した。網替えは週1回行い、12月10日までの98日間中間育成を行った。給餌は自動給餌器および手撒きで行い、種苗の大きさに合わせて配合餌料6種類を飽食量与えた。11月11日（日令143日）にランダムに10尾を抽出し魚病検査を行った。11月26日（日令158日）に右腹鰭抜去標識し、12月10日（日令172日）に竹富島南西海域に放流した。放流海域は水深約7mで、枝珊瑚群落内である。なお、地元小学生に放流してもらうことで、水産資源管理や栽培漁業に対する意識の啓蒙を図った。

3. 結果及び考察

中間育成された種苗は、12月3日（日令165日）までに平均全長106.5mmに成長し、1,054尾が生存した。中間育成の生残率は、64.6%であった。生残率の低下要因は主に飼育初期の減耗で、受け入れ時点で痩せていた個体の摂餌不良に伴う継続的な斃死が生じたことによる。スジ

アラの中間育成においては、全長40mm程度に成長する間に摂餌不良で疲弊して死亡するケースが多く、斃死したスジアラの肥満度は、6.1-14.2と低かった(図1)。これは、輸送によるストレス（環境の変化）と、アルテミアから配合餌料への転換に対する不適合によるものと考えられる。共食いによる斃死も合わせると、この期間の減耗が著しく（図2）、また、ハンドリングに非常に弱いため、網替えの際には手際よく作業を行う必要がある。

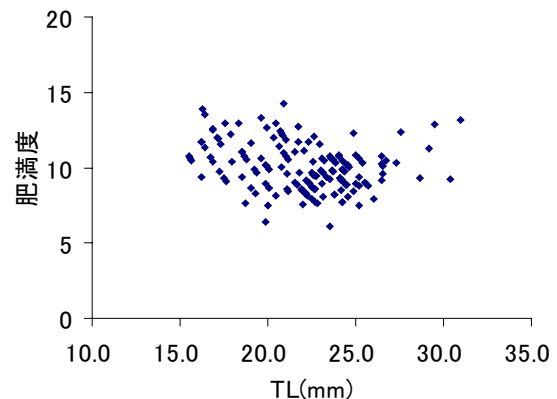


図1. スジアラ斃死魚の肥満度組成分布図

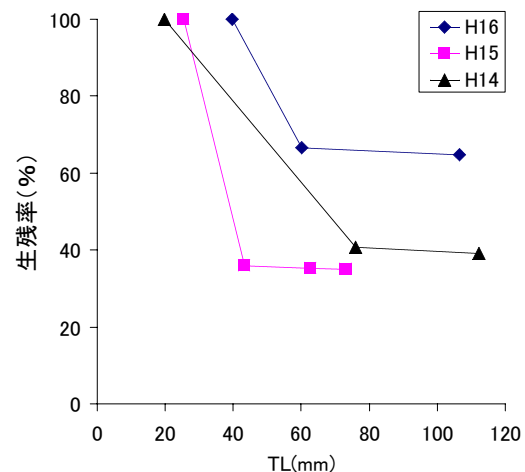


図2. スジアラの生残推移

魚病検査は、イリドウイルスとVNNウイルスのFirstおよびNested PCRとも陰性であった。また、標識作業に伴う斃死は特に見られなかった。放流種苗の再捕情報はまだ無い。

文 献

- 1) 狩俣洋文・仲盛 淳・仲本光男・呉屋秀夫・
福德 学．栽培漁業推進対策事業（スジアラ），
平成15年沖縄県水産試験場事業報告書，2004；1
95
- 2) 狩俣洋文・多和田真周・仲盛 淳・仲本光男
・道清勇介．栽培漁業推進対策事業（スジア
ラ），平成14年沖縄県水産試験場事業報告書，
2003；202